

1 時間強迫症候群

番内 和枝

開業助産婦(富士宮市)

昨年の5月、私は出張助産婦として開業届けを出した。それからしばらくして待望の自宅出産の介助をすることになった。

お産は破水から始まり、ほぼ順調に経過していたが、子宮口が全開した頃から陣痛が弱くなった。子宮口全開から待つこと約6時間。医師に連絡しようかどうかと、迷い始めたころにやっと分娩に至った。児心音がずっと正常であったから待つことができた。とはいえ、初めて自分ひとりで責任を持たなければならなかった分娩。諸々の反省も含めて、このときの感慨はとても言葉ではいいあらわすことができないものであった。

この話を知り合いの産婦人科医師にしたところ、まるで狂気の沙汰であるかのようにいわれ、新米開業助産婦としてはかなり落ち込んでしまったのである。なにが狂気の沙汰かというと、子宮口が全開してから6時間も放置するなんて信じられないというのである。「初心に戻って教科書を見直してみたら？」と一喝。いわれるまでもなく、初産婦の場合の分娩第2期は2～3時間、経産婦は1～1.5時間と教科書には記載されている。しかしこれはあくまでも平均値であり、分娩様式や産婦の諸条件により個人差が大きいという記述を見逃してはいけない。

思えば病院勤務のころは、「1時間」経ったから内診をしましよと、経過をみるためと称して医師と助産婦が入れ代わり立ち代わりに内診を行なう。子宮口が全開すると「それ、分娩室へ！」と産婦を運び込み、「さあ頑張っていきましょ」と叱咤激励しながら延々といきませる。そして子宮口が全開して「1時間」もいきませているのに産まれない、分娩室に入って「1時間」もいきんでいるのに産まれない、となぜか「1時間強迫症候群」の

ようなものがスタッフの間にはあって、医師の顔色をうかがいながら、いつも時間にふり回されていたように思う。この固定された考え方はどこから生じるのか、それがなぜ1時間なのか、いまの私には疑問でならない。

「1時間」の話ばかりでなく、科学性や合理性を迫及するための「数値」や「時間」は、私たちの思考や行動の多くを支配したり、束縛していることに変わりはない。教科書的な数字は、あくまでもある特定された数から割り出した平均値であり、平均値とは多くの量または数の中間値なのだから、もちろん上限もあれば下限もある。生身の人間であればなおさらはみ出す場合もある。それを忘れて、私たちはこの平均値にだけ固執してしまいがちである。

確かに、科学的な裏付けや根拠のある説明は説得力があるし、正常と異常を分けるための指針としての具体的な数値は必要とされる。けれど数字の魔術にまどわされ、ふり回されてはいけない。科学性や合理性を迫及しすぎると、産婦の自然な感情や感覚、そして内なる声を聞きのがしたり無視することにつながるからである。人間のお産を支援する立場にあるものが、生物あるいは動物として自ら持っている「産む力」を閉じ込めてしまっではいけない。お産の場も含めて、人間にはもっと動物的で感覚的な、つまりファジーな部分が必要なのではないだろうか。

開業している先輩諸師の意見を聞くと、自然なお産を心掛けるほど分娩所要時間は長くなるという。医師が常在し大勢のスタッフがそろっている病院ではどうか。救急対応が可能な病院だからこそ、産婦の持つ産む力を十分に引き出した「待つお産」ができるのではないかと思うのだが。